『青山史学』第35号正誤表・訂正表

●正誤表

頁	行	誤	正
横書き35	24	エジプトとギリシアの文化を自らと…	エジプトとギリシアの文化の融合を、自らと…

クレオパトラ治世のハイブリッド性

櫻　井　かおり

はじめに

前30年までエジプトを統治したプトレマイオス朝のクレオパトラ７世[1]は、前51年に父王プトレマイオス12世が亡くなってから、自身の王権を確立すべく東奔西走した。これは、カエサルやアントニウスといったローマの有力者を味方に付けたことからも周知のとおりである。

ところで、クレオパトラは多言語を自在に操り、非ギリシア人とも通訳を介することは極めて稀であったと伝えられている[2]。多くの言語を用いるということは、それだけ様々な文化の歴史と現状について理解することにも繋がる。クレオパトラ以前の当該王朝の王達は、エジプト語は学ぼうともせず、マケドニア語さえお手上げであった者もいたと言う[3]。こうしたなかで、そもそも何故、彼女はギリシア語以外の言語を用いる必要があったのだろうか。

クレオパトラの王権は、覇権を巡る王室内の骨肉の争い、日増しに強まるローマの影響力等、即位当初から様々な要因によって脅かされていた。更に、オクタウィアヌスの政治的宣伝の影響や後世の芸術作品等から受ける悪女というイメージとは異なり、彼女が女性であったということからも寧ろ、当時としてもその王権を確立するのはそう容易ではないことを推し量らねばなるまい。

こうした数々の逆境を、様々な文化的背景を持つ人々との協力によって乗り越えようと試みたことこそが、クレオパトラが多言語を用いた理由であり、彼女の治世の最大の特徴であると思われる。本稿では、ブキス・ステラ、新イシス、「諸王の女王」という３つの観点から、彼女の治世を考察してゆくことで、そうしたハイブリッド性を有するクレオパトラ統治の実態に迫りたい。

１．ブキス・ステラ

上エジプトの中心都市テーベ近郊のヘルモンティス（現アルマント）では、この都市の主神である軍神モンチュの聖牛ブキスとみなされる特徴を持つ雄牛を祀り、ブキスが亡くなる度に新たな雄牛を連れてきてその座に据える慣習があった[4]。また、ブキスの死に際しては、その生涯について刻まれた葬祭用のステラも、彼らのための広大な地下墓地であるブケウムに奉納された。こうしたブキス・ステラの多くは、上部に亡くなったブキスと向かい合い奉献するファラオの図像と、その下の亡くなったブキスの生涯についての碑文によって構成されている。ブキスの儀式は王が出席するとされている重要な儀式のひとつであり、遅くとも前340年のネクタネボ２世の時代には始まっており、後284年のディオクレティアヌス帝の時代まで続いていたことがブケウム出土のステラ群からわかっている[5]。

しかし、ブキス・ステラに描かれる伝統的な図像に反して、実際にヘルモンティス現地に赴いてブキスの儀式を執り行った当該王朝の王は殆ど皆無であったと考えられている[6]。本稿で考察の対象とする、ブキス・ステラAEIN1681[7]についても同様の状況が推測できる。このステラは、アウグストゥスの治世１年目の前29年につくられたものである。上部には、ファラオがブキスに奉献する図像が描かれている。しかしながら、アウグストゥス自身が実際にこの儀式に参加したとは考え難い。何故なら彼は、「神々を崇拝するのには慣れているが、牛はそうではない」と述べて、下エジプトの聖牛アピスとの面会さえ避けたとされているためである[8]。

なお、先に少し触れた通り、ブキス・ステラにはこの雄牛の生涯について記されている。更に、王によって任命された雄牛がヘルモンティスで新たなブキスとして就任した時と、死去後にステラが作られ埋葬される時とでは、異なる王の治世へと移り変わっている場合が殆どである[9]。AEIN1681によれば、この雄牛はプトレマイオス12世の治世28年目の前53年に生まれ、クレオパトラとその弟プトレマイオス13世の共同統治１年目にあたる前51年にブキスに就任させられ、アウグストゥスの治世１年目の前29年に亡くなった[10]。そしてこのステラは、クレオパトラ治世史研究において注目を集めてきた。何故なら、この碑文中にはクレオパトラと思われる人物についての言及が含まれているからである。以下、AEIN1681の全訳を示したい[11]。

「オシリス・ブキスの言霊」、「生けるラーのバー」、「ラーの化身」、彼は「偉大なる雌牛より生まれし者」である。(1)「強大なる者」、「オシリス・ブキスに愛されし者」、「偉大なる神」、「アトゥムの家の主」、カエサル〔アウグストゥス〕の治世１年目の、２度目の太陰暦16日であるファルムティ〔月〕21日に、(2) この気高き神は、「古きラー〔先代のブキス雄牛〕」の姿で天に召された。汝が、円盤と結合しラーがその体内で美しく輝かんことを。汝がこの似姿〔ステラ〕に宿り、(3) その状態がこの上なきものとならんことを。アムンが息を吸い込み、甘き吐息を汝の鼻孔の中へ吹き出さんことを。汝の鼻孔が、常に汝から隔たることなき美しき北風を吸い込まんことを。汝が輝かんことを。すなわち、汝が力強くあらんことを。(4) すなわち、汝のバーが不変のものとならんことを。すなわち、汝が月の如く若返らんことを。汝が、〔聖なる〕諸都市を通り抜けんことを。汝が、神々の祝祭の最中にある諸神殿を横切らんことを。ラーのバーが、汝のバーを蘇らさんことを。シュウのバーが、(5) 汝の鼻孔に授けられんことを。汝の母であるヌトが、彼女の内へと汝を取り込み、永久に汝を欠くことのなきように。汝が、夜から出でては永遠に昼の輝きを放つラーを見んことを。(6)「アトゥムの家」に汝が住まい、その中で永久に生き続けんことを。「上下エジプト王」、「二国〔エジプト〕の主」〔〕、すなわち「ラーの息子」、「諸ディアデマの主」〔〕の治世28年目ファノメト月12日のオシリス・ブキスに愛されし夜に、「ラーの生けるバー」、「ラーの化身」であるブキスが現れた。彼は、「偉大なる雌牛より生まれし者」であり、「８柱神を団結させしタテネン」、「四つ足のアムン」である。(8) 彼は「テーベの主」、「父達の父」、「母達の母」、「エネアドを形作りし者」、「各々の神々を再生せし者」である「モンチュ

の似姿」だ。彼は「正しき者」、「ラーのバーの聖なる似姿」、「主に仕えし者」である「オノフリスの似姿」だが、(9)［……］彼は、パコン〔月〕20日に、その座も永遠たる「テーベの主」モンチュの祝祭最中のヘルモンティスへとやって来た。彼は、任命されるべくテーベに到着した。(10) そこは、彼がかつて「古きヌン」である父の傍らで暮らしていた場所だった。彼は王によって治世1年目のファノメト〔月〕19日に就任させられた。「二国の女主」𓏏、すなわち「愛父女神」である女王が、(11) 彼〔新たなブキス雄牛〕を王の船団と一緒に在ったアムンの小型帆船で運び、テーベとヘルモンティスの全住人と神官は彼と一緒になった。(12) メケイル〔月〕22日に、彼は彼の住居であるヘルモンティスに到着した。彼は、24年1か月8日の生涯であった。彼のバーはラーとなって昇天したのである。そして、彼はその日ここに埋葬された。(13) 彼のカーのための心尽くしの祝祭は、「彼の真の下僕」、「彼の歓喜」、「彼の真の献酒を造っている彼の奉献酒職人」、「領主」、「モンチュ神官」、「ヘルモンティスの主」、「ラー・ホルアクティ」、「彼のエネアド」、「オシリス・(14) ブキス神官」、タセントに生まれし、パー・アムン・プワニーの息子、「アトゥムの家の主」〔ブキス神官〕カラシリスによるもので、彼は永遠の命と安定と幸福を与えられるであろう。

注目すべきは、10－11行目の、女王が船で新たなブキスを連れてきた旨が記されている箇所である[12]。10行目の空欄のカルトゥーシュ内には、ステラが作られた年代とそこに記されている称号に基づけば、クレオパトラの名が刻まれていたと考えられている[13]。先述の通りブキスの儀式は、王が出席するものとされる上エジプトの重要な儀式のひとつである。しかしながら、実際にプトレマイオス朝の王族がヘルモンティスまで赴き儀式に参加したことは確認されていない[14]。以上に基づき先行研究では、クレオパトラが当該王朝において初めてブキスの儀式に実際に参加したことに着目し、主として以下のような見解が提示されている。

まず、エジプト的な伝統との結びつきを重視したとの見方である。例えば、フォスは、この出来事には、クレオパトラがエジプトの伝統を受け継ぐエジプトの女王であるという彼女の主張が込められていると述べる[15]。そして、ファッツィーニは、クレオパトラがその治世において主要な宗教的中心地への巡遊を行ったのは、国土の所有権を得た新たな支配者である彼女が自身とエジプト的な伝統とを関連づけるためであったとする[16]。また、ローラーは、臣民に自身の姿を見せるためにこの儀式が役立ったと述べている[17]。

つぎに、より具体的なものとして、ブキスの儀式への参加と上エジプトにおける支配権の確立を関連づける見方が挙げられる。例えば、アシュトンは、クレオパトラがこの儀式に参加したことは、女王によるエジプト的な伝統への関心を示しているだけでなく、彼女の実権が上エジプトにまで及んでいた実態をも反映しているとみなす[18]。そして、バーシュタインは、ブキスの儀式への参加という機会に乗じて、上エジプトに存在していた父王プトレマイオス12世の支持者達の忠誠心をクレオパトラ自身に向けたのだと言う[19]。また、グルーエンは、クレオパトラがこの後、ヘルモンティスの生誕神殿への資金援助を行ったことも挙げて、こうした一連の働きかけ

により上エジプトの神官団との結びつきを確立したのだと述べている[20]。

さて、ここまでAEIN1681に関する先行研究を確認してきた。これらにおいて一致していることは、クレオパトラがプトレマイオス朝の王族として初めてこのブキスの儀式へ参加した点と、この出来事を通じて彼女が上エジプトでの支配権を確立した点であろう。確かにこの２点は、大筋において間違っていないと思われる。ただし、ブキスの儀式への参加だけで、支配権を確立したとみなすのはやや根拠として不十分であろう。

それでも、クレオパトラ治世には、それまで上エジプトを中心としてしばしば王朝を悩ませていた土着の人々による反乱が殆ど生じていないことも確かである[21]。このことを踏まえて重視すべきは、このブキスの儀式が行われたヘルモンティスという土地柄である。上記の先行研究において言及されてこなかったが、同地は、上エジプトにおける反乱の一拠点であったと思われる[22]。従って、現地の人々との結び付きを強化し彼らの支持を集めることが、必然的に王朝への反抗を弱める結果に繋がったことは疑いない。クレオパトラは、そうした結果を想定して、自らヘルモンティスに赴きブキスの儀式へ参加したと考えられるのである。

さて、クレオパトラによるこうした行為は、エジプト文化を理解し尊重する行為とみなし得る。故に、彼女は、ヘレニズム的な君主でありながらエジプト的な伝統を政策に活用したという観点から、先行研究はこの出来事に注目している。しかしながら、クレオパトラは、自らの政策にエジプト的な伝統のみを活用しただけではない。実際には、エジプト以外の他文化をも積極的に活用している。その具体的な事例として次章では、こうした姿勢が垣間見える最たるものとして、彼女が民衆から「新イシス（νέα Ἶσις）」と呼ばれた現象について考察してゆきたい。

２．新イシス

本稿第１章で扱ったブキス・ステラAEIN1681にも刻まれているクレオパトラの称号のひとつである「愛父女神（*ꜣ ntrt mr-it.s*）」や[23]、前36年にシリアで造幣された銀貨に刻まれた称号「生まれ変わった女神（Θεά νεωτέρα）」には[24]、「女神」という言葉が含まれる。しかし、前者はあくまでエジプト人神官によって授与されたものである[25]。後者は次章で詳述するが、クレオパトラ・テアに因んだものである。彼女は、プトレマイオス６世とクレオパトラ２世の娘のひとりで、前２世紀半ばにセレウコス朝へ嫁ぎ、内紛のなかで実権を掌握し女王として君臨した[26]。従って、クレオパトラが公に自身を「女神」と称した確かな証拠となるような称号はみつかっていないのである。

しかし、プルタルコスによれば、前41年にアントニウスの召喚に応じてタルソスへ赴いた際には、アフロディテさながらの豪奢な装いと演出で現地の人々の注目を集め「アフロディテがアシアの幸福のために、ディオニュソスのところにお祭り騒ぎをしに来た」と噂された[27]。また、クレオパトラが人々の前に姿を現す際はしばしば、前34年にアレクサンドリアで開催されたアントニウスによる対アルメニア戦の凱旋式のような、イシスの聖なる衣装を纏っており「新イシス（νέα Ἶσις）と称された」と伝えられている[28]。そして、イシス、アフロディテ、ウェヌス等々、

当時の人々によって似たような属性を持つものとして強く結び付けられていた女神と[29]、彼女が自らを同一視させていた様子が、多角的アプローチによる先行研究から明らかになりつつある。

そもそも、当該王朝の女性とイシス女神との同一視は、クレオパトラ治世以前から成されており、その始まりはプトレマイオス２世妃アルシノエ２世にまで遡る[30]。しかし、グッドショーが指摘するように、重要なのは、クレオパトラ治世以前に、エジプト由来のイシス信仰が海上交易を通じて東地中海へと広まり浸透していたことである[31]。ホワイトホーンはこの現象に着目し、クレオパトラによるイシス信仰には政治的な意図があったとみている[32]。シュエンツェルは、神々を模倣することと人間の女性と女神とを完全に同一視することとの違いは難しい問題であると考えつつも、クレオパトラに至っては、イシスやアフロディテを模倣するだけに留まらず現世において両女神を具現したと述べている[33]。ヘルブルも、当時のエジプトにおける最下層の人々は、クレオパトラをファラオあるいは、「現世における女王イシス（Isis Regina）」と殆ど同一視していたと主張する[34]。彼女は、自身のヘレニズム王権とエジプトにおけるファラオの役目とを、イシスとの同一視によって融合させようとしたと言うのである。「クレオパトラは、当時の人々によってイシスが、神々と現世両方の女王という普遍的な支配者として益々頻繁に解釈されるようになっていたという事実を利用したのだ」と同氏は述べる[35]。なお、ティルディスレイによれば、ヘレニズムにおけるイシスは、賢い女性であり強大な魔術師として解釈されていたようである[36]。クレオパトラ治世につくられたとされる、彼女のヘレニズム様式によるイシスの姿をした大理石の彫像は、冠には３匹のウラエウスというエジプト様式が採用された一方で、その他はギリシア様式であり、縦巻きの髪の鬘を被りその魔力の象徴であるイシスの結び目を有するキトンを纏って、豊穣の角コルヌコピアを1本抱えている[37]。

こうしたクレオパトラによるイシス信仰を、エジプト人達はどのように受け止めていたのだろうか。その糸口となるのが、デンデラのハトホル神殿である。この神殿は、当該王朝においてはクレオパトラの父プトレマイオス12世の治世の前54年に再建が始まり、この事業は娘である彼女の治世へと引き継がれ、その死後アウグストゥスの治世に完成している[38]。この神殿の南壁に残された、前35－30年に刻まれたとされているカエサリオンとクレオパトラのレリーフは先行研究において盛んに注目されてきたもののひとつである[39]。何故なら、ここには供物を捧げるプトレマイオス15世とクレオパトラが描かれているためである。以下に、このレリーフについての先行研究を挙げてゆきたい[40]。

レイは、この有名なレリーフが刻まれた年代の特定を試みた。そして、コプトスで発見されたカエサリオンに纏わるレリーフの解釈に基づき、クレオパトラ治世15年目（前35年）のものであるとした[41]。また、ビンゲンは、クレオパトラが手に持っているシストルムと、装飾品として刻まれているメナトのネックレスにハトホルの神性を見出した[42]。コヴィルは、デンデラのハトホル神殿の随所に、称号「二国の女主（*nbt Ꜣwy*）」のついた中身が空白のカルトゥーシュに着目し、これをクレオパトラのものではないかと述べている[43]。アーノルドは、ここにおける彼女の役割はイシスの生まれ変わりたることであったと述べる[44]。ティルディスレイは、イシス

とクレオパトラ、オシリスとカエサル、ホルスとプトレマイオス15世を其々同一視させた解釈の構図を解り易く提示した[45]。更に、クレオパトラの前に立ち神々に香を捧げるカエサリオンにはそのカーが小さく刻まれているのに対し、彼の後ろに立つ母であるクレオパトラ自身はカーを持たぬ形で刻まれているのが対照的であると述べる[46]。同氏によれば、このレリーフにおけるエジプト様式のクレオパトラは、宝石を散り嵌めた白い亜麻布のタイトな衣装、重い三つ編みの鬘を被っている。その上に、ネクベトと複数のウラエウスから成るモディウスと、２枚羽と雄牛の角と太陽円盤のついた冠を頂いており、この冠はハトホルから借用したものであると言う[47]。また、シストルムを持ちメナトの首飾りをしていることから、ここにもハトホルの神性が反映されていると説明する[48]。つまり、クレオパトラはデンデラのハトホル神殿南壁のレリーフのように、エジプトの神殿においては、衣装や鬘等も全て伝統的なエジプト様式による姿で自身を表現されているのである。

さらに、従来のクレオパトラ治世史研究において殆ど注目されてこなかった貨幣からも、イシスと自らの結びつきを積極的に活用しつつ、それだけにとどまらなかったクレオパトラの意識がみて取れる。その貨幣とは、前30年のアクティウムの海戦直前に、その近郊の港湾都市パトライで造幣された青銅貨である[49]。表面には「女王クレオパトラ（ΒΑΣΙΛΙΣΣΑ ΚΛΕΟΠΑΤΡΑ）」の銘文と、彼女の肖像が刻まれている。裏面の「パトライ市民のアギアス・リュソノス（ΑΓΙΑΣ ΛΥΣΩΝΟΣ ΠΑΤΡΕΩΝ）」という銘文は造幣者を表すと思われる。ただし重要なのは、裏面中央にエジプト様式によるイシスの冠の図像が大きく描かれている点である。これは、クレオパトラの主導によるものではなかろうか。その根拠となるのは、前２世紀後半にセレウコス朝シリアで造幣された「女王クレオパトラ・テアと王アンティオコス（ΒΑΣΙΛΙΣΣΗΣ ΚΛΕΟΠΑΤΡΑΣ ΒΑΣΙΛΕΩΣ ΑΝΤΙΟΞΟΥ）」との銘文が記された貨幣である。クレオパトラ・テアは、先に述べた通り、プトレマイオス朝から嫁した女性である。この貨幣は、表面には王の肖像が描かれているが、裏面には先の銘文とともにイシスの冠の図像が刻まれている[50]。つまり、クレオパトラが刻まれたパトライの貨幣は、その模倣ではないかと考えられる。ちなみに、イシスの冠の図像を貨幣に刻む手法は、クレオパトラとアントニウスとの間の娘であり、マウレタニア王ユバ２世のもとに嫁いだクレオパトラ・セレーネへと受け継がれてもいる[51]。

加えて、表面のクレオパトラの肖像もその根拠となる。これと類似した肖像を描いた貨幣に、前47年のカエサルによるキプロス返還を記念して、パフォスで前47－30年に造幣された青銅貨がある。表面には、カエサリオンを抱くクレオパトラが描かれており、クレオパトラがイシス-アフロディテとして、カエサリオンがハルポクラテース-エロースとして表現されていると解釈されている[52]。注目すべきは、パトライの貨幣も、このパフォスの貨幣と同じように、横から見ると中央にかけて幅広で上が尖った形状のステファネ（στεφάνη）を頂いたアフロディテの姿でクレオパトラが描かれている点である[53]。このステファネは、時代や地域等により様々な形状を有し、ディアデマの女性版を表すこともある[54]。ただし、ステファネはヘレニズムにおける神性の象徴であるとされている[55]。従って、パトライの貨幣におけるクレオパトラの肖像はギ

リシア様式の姿で描かれていると言えよう。

なお、このステファネと類似する形状の冠を頂いたアルシノエ３世の肖像が描かれた貨幣も存在する[56]。ここにおけるアルシノエ３世の貨幣自体も、アルシノエ２世の貨幣を模倣したものとされている。注目すべきは、その頭上に極めて小さく刻まれた雄牛の角と太陽円盤というエジプトのモチーフによって構成されたイシスの冠である[57]。先述のとおり、パトライで造幣されたクレオパトラの貨幣裏面にも、２枚羽・雄牛の角・太陽円盤というエジプト由来のモチーフをそのまま用い、ギリシアの筆触で描いたイシスの冠の図像が刻まれている[58]。

従って、パトライの貨幣は、クレオパトラ・テア、そしてアルシノエ２世及びアルシノエ３世を模倣したものであり、その造幣にはクレオパトラの主導権が窺えると言えよう。ただし、それだけにとどまらない。何故ならば、クレオパトラはイシスの冠の図像を大きく強調して刻ませているからである。

クレオパトラ・テアの貨幣表面においては、イシスの冠というエジプト的な要素が強調されている。ただし先述の通り、表面は王の肖像であるため、彼女自身の存在をイシスとして前面に押し出しているとは言い難い。逆に、アルシノエ２世やアルシノエ３世は、貨幣の表面にアフロディテに模した姿を描いているためにギリシア的な要素は強いが、エジプト的な要素は弱い。イシスの冠が極めて小さくしか描かれていない点もそれを如実に物語る。確かに、彼女達の貨幣裏面に描かれたコルヌコピアは[59]、イシスと共に描かれる場合もあった[60]。しかしコルヌコピアは、当該王朝の貨幣裏面にしばしば登場するものの、元々はギリシアにおける豊穣のシンボルであるからだ[61]。

これに対してクレオパトラは、一枚の貨幣の表裏を用いて、表面ではステファネを頂いたアフロディテの姿をした自身の肖像というギリシア的な要素を、一方で裏面においては大きく描かれたイシスの冠というエジプト的な要素を自身の王権のシンボルとしてそれぞれ打ち出している。ここには、婚姻関係及び女性の強い影響力によって確立された王権にともなう歴代プトレマイオス朝の領有権の主張を、エジプトとギリシアの文化を自らとイシス－アフロディテとを結びつけるというハイブリッド性で以って行おうとしたクレオパトラの積極的な意図が垣間見える。

こうしたクレオパトラの行動からは、エジプトの文化及びプトレマイオス朝の女性王権の先例と自身とを積極的に結び付けることによって、その王権を確立しようとした姿勢が窺えるのではなかろうか。自身とイシスとの関連づけにおいて顕著にみられるこのようなハイブリッド性を、クレオパトラ治世の独自性と捉えるべきであると思われる。しかし、様々な文化的要素を有するクレオパトラの王権の中核を成していたものとは一体何であったのか。次章では、彼女の治世における最盛期とされている前40－34年について[62]、称号「諸王の女王」を中心に考察したい。

３．「諸王の女王」

クレオパトラは数多くの称号を有したが、その中のひとつに「諸王の女王」がある。これは、アントニウスに授かるという形で得たものだ。カッシウス・ディオによれば、対アルメニア戦後

の前34年に、アレクサンドリアの体育場で催された凱旋式においてアントニウスは、クレオパトラを「諸王の女王（βασιλίδα βασιλέων）」と、そして、カエサリオンを「諸王の王（βασιλέα βασιλέων）」と呼ぶよう人々へ命じたという[63]。また、この称号の存在は貨幣によっても確認できる。前32年に造幣されたローマの貨幣には、表面にアントニウスの肖像とアルメニアの王冠が描かれ、「アントニウスによってアルメニアは征服された（ANTONI ARMENIA DEVICTA）」という銘文が刻まれている。そして、本稿において注目すべきは裏面である。ここにはヘレニズム君主の冠としてのディアデマを頂いたクレオパトラの肖像が描かれ、「諸王および王たる息子達の女王クレオパトラ（REGINAE REGVM FILIORVM REGVM CLEOPATRAE）」という銘文が刻まれている[64]。すなわち、この銘文における「REGINAE REGVM」から、「諸王の女王」という称号の実在が裏付けられるのである。

なお、先行研究においては、この「諸王の女王」の称号そのものについては、歴史的事実の確認以上の見解が殆ど提示されていないといっても過言ではない。それでも、幾らかの見解を確認することはできる。例えば、シュエンツェルが挙げられる。同氏は、アントニウスがカエサリオンはカエサルの実子であると明言した意図は、カエサルの養子であるオクタウィアヌスを中傷するためであったとするカッシウス・ディオの記述[65]に着目する。このことに基づき同氏は、アントニウスとクレオパトラが、カエサリオンがカエサルの遺産を要求できると考えた可能性を示唆し、更には、「諸王の王」という称号は後の皇帝を意味するものに対応すると彼らはみなしていたのだと主張する[66]。

あるいは、そのような意図も存在していたのかもしれない。しかしながら、ここには重要な問題がもうひとつある。それは、そもそも何故「諸王の王」という称号が用いられたのかという問題である。「諸王の王」は元来、エジプトにおいてはオシリスの称号でありファラオ達によっても用いられ、その最古の例は第18王朝のアメンホテプ２世に遡る[67]。ちなみに、プトレマイオス朝王家の女性達は、称号や冠のデザイン等しばしば新王国時代のエジプト王家の女性達の模倣をしていると考えられている[68]。

加えて、「諸王の王」はアケメネス朝ペルシアの王達が用いた称号でもある[69]。一方で、アレクサンドロスは「諸王の王」の称号を敢えて用いなかったとされる[70]。確かに、アレクサンドロスは、ペルシアの王冠の一部であったディアデマを、自身の王冠の一部へと採用した一面も持つ[71]。しかし彼は、「諸王の王」より格上とする「アジアの王」という称号に基づく自身の王権理念の確立に努めた[72]。おそらく、セレウコス朝もそれを受け継ぎ、旧アケメネス朝の領域を支配下に収めていたにも関わらず「諸王の王」の称号は使用しなかったと考えられている[73]。

これに対して、「諸王の王」を積極的に用いるようになったのがパルティアである。パルティアでは、前２世紀頃から王達がこの称号を用い始める[74]。更に前１世紀前半には、ポントス王ミトリダテス６世や、アルメニア王ティグラネス２世も「諸王の王」を名乗っている[75]。ここで注目すべきは、この称号が用いられ始めた背景である。シェイガンは、単純にアケメネス朝に倣ったというだけではなく、東方への勢力を拡大するローマに対抗する文脈のなかでこそ、「諸

王の王」の称号は頻繁に用いられたとの見解を示す[76]。ただし、ポンペイウスは、パルティアを征服してアルメニアを自らにほぼ服属させる形にまで至った際に、改めて「諸王の王」の称号をティグラネス2世に授けている[77]。このことから同氏によれば、この時点において「諸王の王」の称号は、ローマよりも下位へと位置づけられてしまったとも考えられている[78]。故に、アントニウスの側では、ポンペイウスの先例もあるため、あくまでローマ人としての振る舞いの範疇を逸脱してはいないと考えたのかもしれない[79]。

ここで更に検討すべきは、クレオパトラの称号「諸王の女王」は、授与者であるアントニウス自らが単独で発案したものであるかについてである。もし、単にパルティアやアルメニア等の例に倣ったのであれば、息子にのみ「諸王の王」の称号を授ければよい。ここで、先の貨幣の銘文を改めて見直してみれば、「諸王の女王」は王である息子達の上位に位置付けられているように読み取れる。つまり、クレオパトラが授与された目新しい称号である「諸王の女王」自体は、東方における伝統的な称号である「諸王の王」とは異なり、ローマよりも下位に位置付けられてはいないとも解することが可能なのである。

従って、クレオパトラの称号「諸王の女王」は、より踏み込んだ考察が必要である。すなわち、この称号は、エジプトのみならずペルシアにおける伝統的な王権理念に基づきローマに対抗する意志を示すという、極めてハイブリッド性の高い着想によるものであり、そうした姿勢で東方への支配権の拡大に乗り出そうとした強い意志の表れではなかろうか。これに加えて、クレオパトラは「生まれ変わった女神（Θεά νεωτέρα）」や「祖国を愛する者（Φιλοπατρίς）」等目新しい称号を用いており[80]、伝統や先例に基づきつつも当時としては印象的な称号を用い始めることへの意識がとりわけ高かったと考えられる[81]。また、この称号が授与された際に、アントニウスがクレオパトラとの間に得た長男アレクサンドロス・ヘリオスにユーフラテス以東の支配権を約束したことも[82]、こうしたことを反映したものと捉えられる。

更に、当時のクレオパトラが、アントニウスに対して主導権を保持していた部分もあったことが垣間見える間接的な証拠もある。先に、表面にアントニウスが、そして裏面に「諸王の女王」の銘文とともにクレオパトラが描かれた貨幣を挙げたが、表面に両者が並び揃って同じ方向を向いた横顔が描かれている貨幣の存在である。前34/33年にフェエニキアのドラで造幣されたと推定されるクレオパトラとアントニウスの青銅貨においては、彼女の方がアントニウスの前景に描かれている[83]。しかし、アントニウスと正妻オクタウィアが表面に並び揃って同じ方向を向いて描かれている貨幣においては、アントニウスはオクタウィアの前景に描かれているのである[84]。

この貨幣の表面にはクレオパトラを前景とした両者の彫像が描かれているが、裏面にはテュケーの図像[85]と、クレオパトラ治世19年目を表す「ΛΘΙ」と造幣地であるドラを表す「ΔΩ」が刻まれている[86]。クロフォードは、表面に「Π」のマークが刻まれていることから、アレクサンドリアからドラに移ってきた造幣者によるものであると述べる[87]。何故なら、この「Π̂」という記号は、クレオパトラによる大規模な貨幣改革の証だからである。彼女は、その貨幣改革の一環として、自身の青銅貨に従来のプトレマイオス朝のそれにはなかった単位の印を刻むこととし